

令和 2 年 6 月 27 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04455

研究課題名(和文)臨床心理士による自然災害時の被災者・避難者団体に対するアウトリーチ支援の検討

研究課題名(英文) Study of outreach activities for groups of victims and evacuees in natural disasters by clinical psychologists

研究代表者

原田 真理 (HARADA, Mari)

玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：90459298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自然災害における被災者・避難者に対する交流会等での団体支援経験(アウトリーチ活動)を有する日本の臨床心理士(2017年より公認心理師資格ができたため以下心理職)の実践知に焦点を当てながら、より効果的で有効な役割や機能について質的・量的データに基づいて実証的に検討し、臨床心理士による支援モデルを構築することを目的とした。『心理士のためのアウトリーチマニュアル』の概説、および、交流会時に持参できるパンフレット形式、はじめて交流会に参加する『ビギナー編』、また交流会に継続して参加する場合の『継続編』、『交流会での関わり方時系列編』を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

南海トラフや首都直下型の地震、台風、豪雨、火山噴火、感染症等の自然災害は予測不可能な形で発生する可能性が多い。本研究の試みは、自然災害時の心理職によるアウトリーチ活動による心理支援を効果的に進めていくための重要な知見である。成果物であるマニュアル等は、より幅広い社会現場で活動できる心理専門職の養成・教育訓練、研修プログラムの在り方にも有益な教育的示唆を提供することができると考えている。

研究成果の概要(英文)：In this study, we focus on the practical knowledge of Japanese clinical psychologists who have group-support experience (outreach activities) at gathering for victims and evacuees in natural disasters, and about effective roles and functions. As a result, we created an outline of the "Outreach Manual for Psychologists" and the Manual that you can bring at a social gathering, based on qualitative and quantitative data. The format, "Beginner" to participate in the exchange meeting for the first time, "Continuing" when continuing to participate in the exchange meeting, and "Time series of how to get involved in the exchange meeting".

研究分野：臨床心理

キーワード：臨床心理士 公認心理師 アウトリーチ活動 避難者 交流会

1. 研究開始当初の背景

3.11 東日本大震災以降、現在でも東京で避難生活を続けている人々は **6,599** 名にのぼる（復興庁、**2016**）。避難先の生活ストレスに伴う心身の不調、住まいや生活資金、避難元市町村の放射線量や復興状況への懸念と共に、帰還か避難先での定住かの選択を迫られる切迫感など様々な問題を抱え（東京都総務局、**2016**）、今なお、被災者・避難者支援は大きな課題となっている。特に被災者・避難者への「こころのケア」においては、地域コミュニティのつながり・ネットワークの維持・回復・再構築が特に重要とされている（内閣府、**2012**）。被災者・避難者への心理支援の一翼を担う臨床心理士にとって、地域コミュニティの維持・回復・再構築の過程において、自らが果たすことの出来る社会的役割や機能を明確にし、被災者・避難者に対する臨床心理学的地域援助の実践に活かすことが強く求められると考えられる。

東京臨床心理士会では、平成 **24** 年に「**3.11** 震災支援プロジェクト」が発足し、避難者に対する電話メール相談と共に、当事者支援団体によって運営される避難者の集いの場である交流会の支援（アウトリーチ活動）を継続してきた。そして申請者らは、平成 26 年度・平成 27 年度に日本心理臨床学会研究助成を受け、後者（ ）の在京避難者の方々が集う交流会支援における臨床心理士（東京臨床心理士会所属）のアウトリーチ活動の有効性や課題を検討する研究を継続的に積み重ねてきた。

2. 研究の目的

震災、台風、豪雨、火山噴火など様々な自然災害に伴う被災者・避難者への「こころのケア」に関しては、地域コミュニティのつながり・ネットワークの維持・回復・再構築が特に重要とされている（内閣府、**2012**）。被災者・避難者への心理支援を担う臨床心理士にとって、地域コミュニティの維持・回復・再構築の過程で、自らが果たすことの出来る社会的役割や機能を明確にし、被災者・避難者に対する臨床心理学的地域援助に活かすことが強く求められている。本研究では、自然災害における被災者・避難者に対する交流会等での団体支援経験（アウトリーチ活動）を有する日本の臨床心理士の実践知に焦点を当て、効果的で有効な役割や機能について質的・量的データに基づいて実証的に検討し、臨床心理士による支援モデルを構築することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 質問項目の作成

臨床心理士の様々な自然災害における、より効果的で有効な専門職としての役割や機能について、支援モデルの確立を目的とする。方法として、申請者らが実施した予備研究（平成 26～28 年度）を基にして「臨床心理士に求められる役割・働き」というテーマを中心に、次の 3 つの視点から検討して質問紙を作成した。1 つ目は、予備研究から避難者側、2 つ目は臨床心理士側の視点に加えて、3 つ目として、災害直後の団体の形成から時系列に沿って成り立ちを統合した。

(2) 質問項目の検討 デルファイ調査

質問紙は、デルファイ法を用いるため同対象に複数回の質問紙を実施した。そのため、回答者の負担を減らすために、ネットリサーチ（オンラインアンケートツール）を活用する。得られたデータから、デルファイ法にて分析し同意率の高い「役割・働き」を抽出する。対象は、災害時交流会の支援を経験したことのある心理職を対象とした。

(3) 質問項目の実践的検討 実際の交流会におけるフィールドワークの実施

検討した質問項目を実際の災害支援交流会にてフィールドワーク実施して実践的に検討した。方法として、質問項目で一致率の高かった「役割・働き」の項目についてフィールドノーツを作成して、実際の交流会の中での「役割・働き」について実践的な検討を行った。得られたデータは質的にオープンコーディングを実施して類型化を行った。

当初は、対象を A：自然災害に伴う避難者を対象としたアウトリーチによる団体支援を経験した臨床心理士、B：一般的な臨床心理士として、A・Bの対象にて 2 検定を実施する予定であったが、以下の理由として、対象者を A のみに定め、質問項目をもとにしたフィールドノーツを作成し、実際の交流会に参加にあたって実践的に検討する方法に変更した。理由として、本研究は、実践で役立つ項目の策定であるため、臨床心理士間の比較によるものよりも、実際にフィールドワークによる交流会に検討することにより実践性の高い検討ができると判断したからである。

(4) 小冊子の作成

実際にフィールドワークにて実際に交流会に参加し、質問項目で一致率の高かった「役割・働き」について実践的な検討を行い、得られたデータを類型化、および基本情報(参加時期・参加形態・交流会の特徴)との関連を検討して臨床心理士による災害時交流会支援(団体支援)のモデルを作成し、小冊子を作成した。

4. 研究成果

研究の主な成果、得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

(1) 質問項目の作成

避難者から求められた役割・活動、実際に臨床心理士が活動した役割、団体の変遷から求められた役割・働きという3つの視点から「自然災害に伴う団体支援で求められる臨床心理士の役割・働き」を明確にし、それらを項目化し、質問紙を作成した。

(2) 質問項目の検討

オンラインネットリサーチを用いて、調査は合計 2 回実施した。災害支援経験者に対して 10 件法からなる項目に対する同意の度合いの記入欄(同意しない - 同意する)として記入を依頼した。10 件法のうち得点 7 点以上の回答に対して、回答が同意率 80%以上得られた項目はコンセンサスが得られたとみなした。また、本研究は探索的な調査であるため、同意率 51~69.9%を「低い同意」、70~79.9%を「中程度の同意」、80%以上を「同意」と分類し、コンセンサスが得られたとみなされない「低い同意」および「中程度の同意」は評価項目の下位である参考項目として残した。

また、それぞれの質問項目毎に自由記述欄を設け、同意しない場合はその理由・意見を記入するように依頼した。また初期リストの末尾には全体項目の振り返りにより、その他に加えたい項目があれば記入するような自由記述欄を設けて記入を依頼した。

調査結果をフィードバックする方法として、それぞれの項目における同意の割合をグラフ化し、また自由記述の理由・意見も記載し、それらを参考にした上でもう一度調査シートに回答するよう依頼した。第 2 回調査を持って、これを本研究のコンセンサスとした。

デルファイ第 1 回調査

調査対象:12名 調査期間:2018年9月-2019年1月 臨床経験年数 平均22.1年(SD=9.74)

交流会参加回数 11回以上(75%), 6~10回(8.3%), 2~5回(16.7%) 調査内容: 初期質問項目(1)を基に作成した「交流会に求められる/求められた心理職の役割」及分類で、6の主題からなる40項目を調査した。

デルファイ第2回調査

調査対象: 第1回調査の回答者11名 調査期間: 2019年3月 2019年4月 調査内容: 第1回調査を踏まえ修正を加えた18項目であった。第2回調査では、各項目毎に、第1回調査の結果で得られた中央値1-5と、それぞれの同意の度合いに回答した人数を示すと共に、第1回調査で回答者自身が答えた得点も呈示した。また、第1回調査から修正された内容・箇所がわかるように明示した(表1)。

表1 デルファイ第1回調査、および第2回調査の同意率%

調査項目	1回目		2回目	
	同意率(%)	分類	同意率(%)	分類
1. アセスメントについて				
1 交流会全体を見直し、スタッフ間、参加者間に心理的な葛藤場面・トラブルが生じていないかを観察し、同時に判断し、随機対応を活動することが必要である	100.0	高	-	-
2 余の代表者やその他の関係者も、参加者の様子や交流会の状況をアセスメントし説明できることが必要である	100.0	高	-	-
1 回目 継続参加者については、性格傾向や視座をたらし、次の会における影響などを考えることが必要である。	83.3	高	90.9	高
2 回目 継続参加者については、可能な範囲で性格傾向や視座を把握し、次の会における影響などを考えることが必要である。	100.0	高	-	-
4 交流会運営スタッフが当事者の場合は本人の被災状況、トラウマへのアセスメントとフォローが必要である。	100.0	高	-	-
5 交流会運営スタッフが当事者の場合は、二次受療へのアセスメントフォローが必要である。	100.0	高	-	-
6 個別の会話等で気になる参加者について、余の代表者やその他のスタッフに報告し、継続的な観察を依頼することが必要である。	91.7	高	-	-
1 回目 あらかじめ交流会のイメージを持って(想像して)参加することが必要である。	75.0	中	90.9	高
2 回目 あらかじめ交流会のイメージを持って(想像して)参加することが必要であるが、それにとらわれすぎないよう注意する。	75.0	中	63.6	低
1 回目 交流会での活動や心理職としての役割は、日常臨床場面の発展と異なり、戸惑いがあった。	75.0	中	63.6	低
2 回目 交流会という場で、参加者から「どこに居たいの?」「居場所はないの?」などの自己開示に関する質問求められることがある。面接では開示しないことができるが、交流会の場では、参加者に対して開示しない行為が不自然となることもあるので、場合によっては開示することも必要である。	100.0	高	-	-
1 回目 心理職という職業を開示して参加することが必要である。	83.3	高	90.9	高
2 回目 心理職という職業を札や掲示などを通じて、開示して参加することが必要である。	83.3	高	90.9	高
2. 実施について				
1 1 回目 交流会支援において、本人(参加者同士やスタッフ)をつなぐことが必要である。	83.3	高	100.0	高
2 1 回目 交流会支援において、本人(参加者同士やスタッフ)をつなぐことが必要である。	83.3	高	100.0	高
1 1 回目 交流会支援において、参加者を他の専門的な支援につなぐことが必要である。	75.0	中	100.0	高
2 1 回目 参加者で医療や福祉、法律相談が望ましいと思われる場合、専門的な支援へつなぐたり、地域や仲間での支援のあり方を検討することが必要である。	75.0	中	100.0	高
3. 交流会における対応・介入について				
13 交流会支援において、参加者に(専門家色を前面に出さず)きき取り関わることは必要である。	100.0	高	-	-
14 1 回目 交流会支援において、参加者に対して個別の相談が必要である。	83.3	高	100.0	高
2 1 回目 交流会支援において、参加者の話や相談のニーズがある場合、できる範囲で応じることが必要である。	100.0	高	-	-
15 交流会支援において、参加者の話を傾聴することは必要である。	100.0	高	-	-
16 交流会支援において、参加者の話を傾聴することは必要である。	100.0	高	-	-
1 1 回目 交流会支援において、参加者の話を傾聴し、話を必要以上に深めないことは必要である。	66.7	低	100.0	高
2 1 回目 交流会支援において、参加者の話を傾聴し、話を必要以上に深めないことは必要である。	66.7	低	100.0	高
1 1 回目 交流会支援において、特技や趣味を活用することは必要である。	83.3	高	90.9	高
2 1 回目 交流会支援において、その意図や影響を検討した上であれば、特技や趣味を活用することも必要である。	83.3	高	90.9	高
4. 支援の場について				
18 交流会支援において、通常の心理として求められる専門的な役割以外の役割を果たすことは必要である(例:会場設置など)。	100.0	高	-	-
5. 交流会に参加する際の基本的なスタンスについて				
19 これまで行ってきた通常の臨床現場での経験や心理の技法・態度を活かすことが必要である。	100.0	高	-	-
20 参加している参加者の方々の見守る意識をもつて活動することが必要である。	100.0	高	-	-
21 参加者との交流において、できるだけ遠くから、深く関わる時と距離を保つ時など、心理職として様々な役割を担うことが必要である。	91.7	高	100.0	高
22 参加者との交流による結果や効果が明確に実感できなくても、その意味や不安感に耐えながら活動することが必要である。	91.7	高	-	-
23 自分自身の活動の仕方や動き方、参加者への関わり方、活動にあたって抱く考えや感情などを内面に振り返りながら活動することが必要である。	91.7	高	-	-
6. 連携について				
24 同じ交流会に参加している心理職が増える場合、交流会の前夜や交流会中、情報交換・連携をしながら活動することが必要である。	100.0	高	-	-
25 参加者との交流や個別支援などにおいて、他の専門家(弁護士、保健師、社会福祉士、保育士等)と連携・協働することが必要である。	91.7	高	-	-
1 1 回目 交流会を主催する当事者団体との関わり交流会では、同じ団体に継続的に参加することが必要である。	75.0	中	100.0	高
2 1 回目 交流会を主催する当事者団体との関わり可能な範囲で同じ団体に継続的に参加することで、より丁寧に参加者へのケアや支援を行うことが必要である。	75.0	中	100.0	高
27 団体の中心となるメンバーと関係を作る。例えば、運営をする代表や、その幹部となるメンバーとの関係作りを意図的に行うことが必要である。	100.0	高	-	-
28 継続しながら、自分自身も交流会スタッフの一員という共通認識をもちながら活動することが必要である。	91.7	高	-	-
1 1 回目 団体の中心となるメンバーと連携して団体の「立ち上げ」から携わることが必要である。(例えば、団体形成にあたって、団体の目標や、団体の規約、また広報の方法等、中心となるメンバーと連携・意見を言う、相談に乗る等)である。	16.7	低	100.0	高
2 1 回目 交流会の立ち上げの経緯や目的について知る必要がある。	16.7	低	100.0	高
30 参加者同士が信頼を深めるために、例えばグループに入れない人に声をかけたり、またグループを構成するにあたって共通性(年齢、性別等)を配慮しながら対応することが必要である。	91.7	高	-	-
1 1 回目 参加者が求めるニーズを見立て、それを企画(交流会、イベント等)に活かすことが必要である。	75.0	中	72.7	中
31 2 回目 交流会の目的を大切にしつつ、参加者が求めるニーズを見立て、それを交流会の企画の中に取り入れる提案をすることも必要である。	75.0	中	72.7	中
1 1 回目 交流会から離れている参加者に対して、戸別訪問など、参加を促す工夫を行う、考えることが必要である。	75.0	中	90.9	高
32 2 回目 交流会から離れている参加者に対して、無理強いしない範囲で、参加を促す手段(電話連絡や戸別訪問など)を検討することが必要である。	75.0	中	90.9	高
33 話術の中で誤解が起こればときに、備いつた人への対応や、それが拡大してしまわないような対応をすることが必要である。	91.7	高	-	-
34 1 1 回目 交流会の企画運営をする上で、他の団体との交流は大切であり、その交流を促すことが必要である。	41.7	低	54.5	低
2 1 回目 交流会の企画運営をする上で、交流会の性質や目的を尊重しつつ、他の団体との交流を促すことも時に必要である。	41.7	低	54.5	低
35 その程度求められるニーズに対して、積極的な対応が必要である。	100.0	高	-	-
36 1 1 回目 避難先地域との関係作りを提案していくことが必要である。	83.3	高	100.0	高
2 1 回目 必要要件を踏まえた上で、避難先地域との関係作りを提案していくことが必要である。	83.3	高	100.0	高
37 参加者自身が主体的に考え、行動できるようにする記録・支援をしていくことが必要である。	100.0	高	-	-
38 1 1 回目 参加者のカウンセリングを行うことが必要である。	41.7	低	100.0	高
2 1 回目 必要要件に必要に応じて、参加者の個別相談を行うことが必要である。	41.7	低	100.0	高
39 1 1 回目 代表者のカウンセリングを行うことが必要である。	16.7	低	81.8	高
2 1 回目 必要要件に必要に応じて、代表者の個別相談を行うことが必要である。	16.7	低	81.8	高

(3) 質問項目の実践的検討 実際の交流会におけるフィールドワークの実施

2019年開催された在京避難者の交流会に参加した臨床心理士5名を対象に、同意が得られた質問項目を主題としたフィールドノーツを作成し、それをもとに心理職に求められた「役割/働き」を実践的に検討した。得られた記述内容に対して質的研究法のオープンコーディングを実施して類型化をした(表2)。

(4) 小冊子の作成

フィールドワークで得られたデータを類型化、および基本情報(参加時期・参加形態・交流会の特徴)との関連を検討して臨床心理士による災害時交流会支援(団体支援)のモデルを作成し、小冊子を作成した。小冊子は、『心理士のためのアウトリーチマニュアル』の概説、および、交流会時に持参できるパンフレット形式、はじめて交流会に参加する『ピギナー編』、また交流会に継続して参加する場合の『継続編』、『関わり方時系列編』を作成した。

表2 交流会で実際に心理職に求められた「役割/働き」に関するフィールドノーツの類型化

質問項目	コード	20. これまで行ってきただけの臨床現場での経験や心理の技法・態度を活かすことが必要であった。	技法より態度・スタンスを活かすことの必要を感じた 心理士としての一貫した態度 心理士として意識した基本態度 (前出をすぎず) それぞれの参加者や団体の達成を見守る 複数の方の団体の方も話、写真もどの方も写るように配慮 全体で何を話しているかを見守ることの必要を感じた 見守る意識の心がけ 見守る意識をもった活動
1. 交流会全体を見渡し、スタッフ間、参加者間に心理的な懸念場面・トラブルが生じていないかを観察し、顕時に判断し、臨機応変に活動することが必要であった。	コード 複数の交流会合同のため全体を見ることが求められた 負担・問題をみて介入する準備をしていた 初期の参加などで観察を大切に 初めての参加だからこそ継続してできた心算との情報共有は大切 他の専門家団体と連携が取れるように気を付けた(あいさつ) 各交流先に平等にかかわらうとこころがけた 参加者の不安をアセスメントした 代表者の不安や思いのアセスメントと対応 代表者とのつながり 代表者とのつながり 代表者とのつながり 継続する心理士と初期の心理士との役割分担が有効 開示しないが支援が必要な場合を想定してアセスメントはしていた 病理性性格傾向は、継続して参加している団体は意識する	21. 参加している参加者の方々を見守る意識をもて活動することが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
2. 会の代表やまとめ役の相談に乗る際、参加者の様子や交流会の状況等をアセスメントし説明することが必要であった。	代表者とのつながり 代表者とのつながり 代表者とのつながり 継続する心理士と初期の心理士との役割分担が有効 開示しないが支援が必要な場合を想定してアセスメントはしていた 病理性性格傾向は、継続して参加している団体は意識する	22. 参加者との交流において、できることできないこと、深く関わる時と距離を保つ時など、心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
3. 継続参加者については、可能な範囲で性格傾向や病歴を把握し、次の会における影響などを考えることが必要であった。	継続する心理士と初期の心理士との役割分担が有効 開示しないが支援が必要な場合を想定してアセスメントはしていた 病理性性格傾向は、継続して参加している団体は意識する	23. 参加者との交流による成果や効果に実感できなくとも、その意味さや不安に耐えながら活動することが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
4. 交流会運営スタッフが当事者の場合は本人の被災状況等、トラウマへのアセスメントとフォローが必要であった。	被災状況・トラウマのアセスメントは大前提として 今後の震災の不安が語られた。アセスメントとフォローの必要性 参加者の緊張度合いのアセスメント 初回は関わりよりも観察が多かった。行動観察からのアセスメント	24. 自分自身の活動の仕方や動き方、参加者への関わり方、活動にあたって行く考えや感情などを内省的に振り返りながら活動することが必要であった。	意味さや不安に耐えながら活動することが必要であった。 意味さや不安に耐えながら活動することが必要であった。 初回でも参加することの「意味」を考えた。 常にフォードバックながらの動きや発言は必要であった 内省的に振り返り必要性 開会前、開会中にも常に情報共有をしていた。他の心理職へも紹介 継続して参加する心理士と初期の心理士との役割分担の必要性 心理職と開示しなかったのが必要であった。開示した場合は重要 確認し
5. 交流会運営スタッフが非当事者の場合には、二次受療へのアセスメントとフォローが必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	25. 同じ交流会に参加している心理職が揃っている場合、交流会の前後や交流会中に、情報交換・連携をしながら活動することが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
6. 個別の会話等で気になる参加者について、会の代表やまとめ役のスタッフに報告し、継続的な観察を依頼することが必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	26. 参加者との交流や個別支援などにおいて、他の専門家(弁護士、保健師、社会福祉士、保育士等)と連携・協働することが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
7. あらかじめ交流会のイメージを持って(想像して)参加することが必要であるが、それにとらわれすぎないように注意した。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	27. 継続しながら、自分自身も交流会スタッフの一員という共通認識をもちながら活動することが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
8. 交流会での活動や心理職としての役割は、面接室内における臨床活動と異なり、戸惑いがあった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	28. 交流会の立ち上げの経緯や目的について知ろうとすることが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
9. 交流会という場で、参加者から「どこに住んでいるの?」「結婚しているの?」などの自己開示に関する質問を求められることがあった。面談では開示しないことができるが、交流会の場では、参加者に対して開示しない行為が不自然となることもあるので、場合によっては開示することも必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	29. 参加者同士が親睦を深めるために、例えばグループに入れない人に声をかけたり、またグループを構成するにあたって共通性(年齢、年齢、性別等)を配慮しながら対応することが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
10. 心理職という職業を名刺や掲示などを通じて開示して参加することが必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	30. 交流会の企画の中に取り入れる提案をすることも必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
11. 交流会支援において、状況に応じて、人々(参加者同士やスタッフ)をつなぐことが必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	31. 交流会から離れている参加者に対して、無理強いしない範囲で、参加を促す手立て(電話連絡や戸別訪問など)を検討することが必要であった	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
12. 参加者で医療や福祉、法律相談が望ましいと思われた場合、専門的な支援へつないだり、地域や仲間での支援のあり方を検討することが必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	32. 話の中で誤解が起ったときに、備った人の対応や、それが拡大してしまわないような対応をすることが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
13. 交流会支援において、参加者に(専門家色を前面に出さずに)さりげなく関わることは必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	33. 交流会の企画の中に取り入れる提案をすることも必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
14. 交流会支援において、参加者の中に個別の相談のニーズがある場合、できる範囲で応じることが必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	34. その程度求められるニーズに対して、臨機応変、かつ柔軟に対応することが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
15. 交流会支援において、参加者の話を傾聴することは必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	35. 必要やニーズに応じて、参加者の個別相談を行うことが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
16. 交流会支援において、参加者の話を傾聴することは必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	36. 参加者自らが主体的に考え、行動できるようにする配慮・支援をしていくことが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
17. 交流会支援において、参加者やスタッフのエンパワメントを意識することは必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	37. 必要やニーズに応じて、参加者の個別相談を行うことが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
18. 交流会支援において、その意義や影響を検討した上であれば、特技や趣味を活用することも必要であった。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった	38. 必要性やニーズに応じて、代表者の個別相談を行うことが必要であった。	状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。
19. 交流会支援において、通常心理職として求められる専門的な役割以外の役割を果たすことも必要であった(例:会場設置など)。	代表者への不満が出ることもある。心理士同士での共有 継続して参加している団体は意識する 参加者の感情の観察をした 複数回参加することで、会のイメージを持ちやすい 初めでの室内の場合は、逆にイメージのとらわれないようにした 事前把握しておくことで想定しやすかった 事前イメージの大切さと当該イベントの実際を把握すること オープンスペースで相談が来た場合の対応、継続の在り方を考えた 面接室以外の活動があったので戸惑いはなかった 距離感近かったが戸惑いはなかった		状況や相手のPersonalityにより続けさせた 心理職として線引きや枠組みを意識して活動することが必要であった。 線引き・枠組みの意識 セラビエとの違いを意識した 初回でも参加することの「意味」を考えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 金田一賢顕、原田真理	4. 巻 18
2. 論文標題 東日本大震災における在京避難者団体の変遷と治癒の効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 論叢 玉川大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 原田真理	4. 巻 18
2. 論文標題 自然災害被災者対象の交流会におけるマニュアルの作成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 論叢 玉川大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 原田真理、金田一賢顕、新井雅、鶴田信子
2. 発表標題 臨床心理士の行う支援活動 在京避難者支援活動からの考察
3. 学会等名 第36回日本心理臨床学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 原田真理	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 子どものこころ、大人のこころ 先生や保護者が判断を誤らないための手引書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<https://www.facebook.com/groups/605047413703054/>
成果物をこのページに提示しています

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	金田一 賢顕 (KINDAICHI Yoshiaki) (50626926)	玉川大学・教育学部・非常勤講師 (32639)	
研究 分 担 者	新井 雅 (ARAI Masaru) (80750702)	跡見学園女子大学・心理学部・准教授 (32401)	